ビルディング

夢野久作

巨大な四角いビルディングである。

窓という窓が残らずピッタリと閉め切ってあって、室（へや）という室が全然、暗黒を封じている。

その黒い、巨大な、四角い暗黒の一角に、黄色い、細い弦月が引っかかって、ジリ、ジリ、と沈みかかっている時刻である。

私はその暗黒の中心に在る宿直室のベッドの上に長くなって、隣室と境目の壁に頭を向けたまま、タッタ一人でスヤスヤと眠りかけている。

私は疲れている。考える力もないくらい睡（ね）むたがっている。

私の意識はグングンと零（ゼロ）の方向に近づきつつある。無限の時空の中に無窮の抛物線を描いて落下しつつある。

その時に壁一重（ひとえ）向うの室からスヤスヤという寝息が聞こえて来た。私の寝息にピッタリと調子を合せた、私ソックリの寝息の音が……静かに……しずかに……。

……壁一重向うの室にモウ一人の私が寝ているのだ。私の頭の方に頭を向けて、私の寝姿を鏡に映したように正反対の方向に足を伸ばしつつ、スヤスヤと睡りかけているのだ。

……その壁の向うの私も疲れている。考える力もな

いくらい睡(ね)むたがっている。そうしてその意識がグングンと零の方向に近付きつつある。無限の時空の中に、無窮の抛物線を描いて……グングンと……。

私はガバと跳ね起きた。眼がパッチリと醒めた。隣の室が覗(のぞ)いてみたくなった。

しかし私は闇暗(くらやみ)の中で半身を起したまま躊躇(ちゅうちょ)した。

もし隣の室を覗いた時に、私と同じ私がスヤスヤと寝ていたとしたら、それはドンナに恐ろしい事だろう……とはいえ又、万に一つ隣の室に誰も居なかったとしたら、その恐ろしさが何層倍するだろう……と……。

私はそう思い思い何秒か……もしくは何分間か、眼

の前の闇暗（くらやみ）の核心をジーッと凝視していた。凝視していた……。

……と……そのうちに或る突然な決心が私に襲いかかった。その決心に蹴飛ばされたように私は、素跣足（すはだし）のまま寝台を飛び降りた。宿直室を飛び出して、隣の室に通ずる、暗黒の廊下を突進した。

……するとその途中で何かしら真黒い、人間のようなものと真正面から衝突したように思うと、二つの身体（からだ）がドターンと人造石の床の上にたおれた。そのままウームと気絶してしまった。

巨大な深夜のビルディング全体が……アハ……アハ

……アハ……と笑う声をハッキリと耳にしながら……。

底本：「夢野久作全集３」ちくま文庫、筑摩書房
１９９２（平成４）年８月24日第1刷発行
入力：柴田卓治
校正：しず
２０００年５月19日公開
２００３年10月24日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。